様式2　　**令和7年度　清瀬市立清瀬第三小学校　　学校評価**　　資料　指ー1③

学校教育目標

○よく考え　やりぬく子ども（重点目標）　○やさしく　思いやりのある子ども　　○明るく　元気な子ども

目指す学校像（ビジョン）

【目指す学校像】　学ぶ楽しさのある学校　信頼でき、協働したくなる学校　働く喜びのもてる学校

【目指す児童・生徒像】「他者と協働して主体的に問題を解決しようとする子ども」

【目指す教師像】　子供と共に歩む教職員　◎互いに高め合う教職員　共に学び合い、協力し合う教職員

育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動

【育成を目指す資質・能力】

「協働問題解決能力」

○基礎的な力（言語、数量、情報スキル）

○他者と共に考える力（協働問題解決力、メタ認知）

○他者と共生できる力（人間関係形成力）

○社会の中で実践する力（社会参画力、自律的活動力）

【特色ある教育活動】

重点1基礎・基本の定着と言語活動の充実を図ることでの思考力・判断力・表現力の育成

重点2他者と共生できる豊かな人間性を育む。

重点3かかわり、つながる力を育む地域に開かれた学校づくりを推進する。

前年度までの学校経営上の成果と課題

・「誰にでも分かる授業づくり」の視点で三小スタンダードを基にした指導や教室環境の整備を継続することができた。協働問題解決能力の土台となるように、校内研究では算数科における「主体的に取り組む児童の育成」を目指した研究を行い、授業改善が進んだ。体験学習など学校支援本部の支援による教育活動もさらに充実してきたが、課題としては、学習の土台となる基礎・基本の定着と主体的な学習への取組を各教科・領域で進めることである。特に、分かる授業つくりと学び直しを大切にした学力の底上げが急務である。また、学校支援本部をはじめとする保護者・地域や専門家の方々と連携し体験活動を積み重ねる中で、基礎的なスキル、思考力・判断力・表現力、人間関係形成力、社会的実践力などの力を意図的・計画的に育むことに取り組む。また、今年度は児童の防災意識を高める活動を計画する。

柱	具体的方策	自己評価			学校関係者評価	次年度以降の改善方策
		評価		課題及び次年度以降の改善方策（案）	学校関係者による「自己評価」についての評価	学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策
		取組指標	成果指標			
基礎的な力	図書館活用による読書、調べ学習を推進し検証する。	4	3	・国語や総合で図書館の本を活用して、調べ学習を実施することができている。継続したい。高学年になると、インターネット検索による調べ学習の比重が増すので、団体貸出等の本の活用も促したい。 ・休み時間は外遊びを推進しているため、図書室開放が活発化していない面がある。AS図書室も宿題を取り組む児童が多い。学習計画の工夫が必要である。	・積極的な図書館活用は評価できる。授業設計の成果で調べ学習の達成率も上がっている。 ・インターネットと書籍のハイブリットのバランスも考える必要がある。	・経営目標を意識して、平均読書量だけではなく、一人一人の読書の機会の変化に向けた指標を考えていく。調べ学習の際に、インターネット検索とのバランスやハイブリッド的な活動も考慮する。 ・読解力の基礎としての語彙の獲得や読み取りについて、確認していく。
	校内研究による授業改善と個別指導によって、児童の主体性と習熟についての効果を検証する。	4	3	・校内研究で教材研究が深まった。その後の授業改善に生かすための研究計画を工夫していきたい。 ・習熟については個人差が大きい。さらなるASの活用や家庭との連携も必要である。	・自己評価は妥当である。学校と家庭の目標のすり合わせをし、家庭とのさらなる連携が必要である。 ・授業改善と個別指導の具体的な方策や効果の検証をさらに大切にしたい。 ・基礎的な力を伸ばし、底上げをしてほしい。	・家庭との連携を進めるために、学習状況についての家庭への理解啓発を進める。 ・児童一人一人の達成度合いを確かめながら、授業や指導の改善を校内研究と研究実践によって継続する。
他者と共に考える力	各種便りやホームページ、ホーム＆スクール配信等で情報を発信する。地域教材、人材との交流を大切にした学習を充実させる。	3	4	・地域教材、人材との交流は進み、多様な学びや体験ができている。継続していきたい。 ・情報の配信は、担任の作業時間の確保が難しい面もあり、当初の計画を全てはできていない面があった。	・豊かな地域資源を活用し、多種多様な経験ができていて素晴らしい。教員の負担にならないように実行してほしい。 ・体験だけで終わらせず、日常に生かせるような学習展開をお願いしたい。 ・情報の発信は、継続・発展のために必須である。省力化しながら達成してほしい。	・体験や交流活動を具体的な学びの成果に結びつける学習展開を工夫する。 ・情報発信の方法の工夫や目的に合った内容を計画する。
	異学年交流を中心とした活動の実践と検証を充実させる。	4	4	・たてわり班を活用した異学年での交流場面が増え、学習が深まった。児童の班への意識が高まった。さらに、そのつながりを生かす場を工夫したい。 ・実施時間帯を固定化する等の計画も考えていきたい。	・異学年交流は、役割や活動を工夫しながら積極的に今後も継続してほしい。 ・固定化も良いが、様々な交流方法を考えても良い。	・今年度の計画を見直しながら異学年交流を継続する。 ・児童の役割については、児童一人一人の実態に応じて考慮し、成長を促していく。
他者と共生できる力	道徳科を要とした命、人権、福祉、国際理解に関する学習を充実させる。	4	4	・計画的に、人権や福祉、国際理解を深めるための授業を実践することができた。 ・他者と共生する意識は高まっているが、日常生活のコミュニケーションの中で、生かされていない場面が見られる。	・交流学習やデフリンピアンとの交流等、道徳授業以外での体験学習も進んでいる。気付きや学びを他者への思いやりや自分の生活に生かすことが大切なので、その課題意識は評価できる。具体的方策を考えたい。 ・地域の国際性に目を向ける等のさらなる工夫も考えても良い。	・道徳授業を要としながらも、多様な体験や交流活動を継続していく。その上で、他教科や指導にも関連させ、日常生活に生かせるような学習展開を工夫していく。 ・地域教材について、多様性の視点をもって開発を目指す。
	いじめ未然防止の取組の毎学期実施。（3年生以上は年2回のアセス）「挨拶と温かい言葉がけ」を教員が心がけ、大切にする指導を行う。	4	4	・挨拶と温かい言葉がけを意識しながら指導を継続した。 ・児童への対応が多くなった時に、担任一人では難しい場面があった。他の教員が協力しながら継続して対応している。	・挨拶を自分からできるようにさらに取組を継続する。言葉が学校の雰囲気を作っていくので、大切にしていきたい。 ・いじめ対応はたいへんだが、協力して継続してほしい。難しい場面については、大切な自己評価である。	・挨拶と言葉を大切にした指導や学習をさらに推進していく。 ・教職員と保護者、地域の方等の人権教育のスキルを高める研修や機会を大切にし、児童への指導に生かす。 ・組織としての対応を継続する。
社会の中で実践する力	三小スタンダードを有効活用し、その効果検証を行う。	3	3	・三小スタンダードを基に指導することはできているが、児童の実態を考えたり、指導のポイントを意識したりするなど、有効的な活用がさらに必要である。	・三小スタンダードに対する保護者の理解度が低いようだ。保護者への理解を深め、連携する必要がある。 ・学習場面での効果は出ているようだが、三小スタンダードに関する具体的な活用や効果検証、評価基準について明確になっていない面もある。	・三小スタンダードの内容の検証と考察を進める。また、重点化や具体的な指導時期等も工夫していく。 ・保護者への啓発を推進し、学校と保護者の意識の共有を図る。
	体育学習・活動と食育の充実、生活リズム・メディアコントロール点検による生活習慣の見直しによって、自己の健康や運動に関心をもたせる。	4	3	・体育学習の工夫や食育の充実は進んでいる。 ・メディアコントロールについて、児童の関心は高まっているが、児童の目標設定に問題がある。	・メディアコントロールについては、保護者と教員の意識に違いが見られる。その意義を伝えたり、1学期に目標設定を工夫したりするなど、家庭との連携が必要である。 ・体育活動や食育は評価できる。継続してほしい。	・保護者への啓発を進め、保護者の協力を生かして児童の主体的な目標設定を促し、活動を推進する。 ・体育活動は授業改善と旬間の取組の推進を継続する。食育は給食での取組、野菜づくり活動、地域の農産物等、それぞれの活動を連携させた計画を推進する。
本校の特色	校内委員会の情報を基に、個に応じた指導やユニバーサルデザインを工夫した分かりやすい授業を行う。	4	4	・校内委員会での情報共有によって、校内での連携が進み、効果的な対応ができている。さらに継続する。 ・個別対応の必要な児童が多いため、さらに協議と実践が必要である。	・校内委員会の取組が連携を進めている。システムが機能しているので、評価できる。 ・家庭との連携が難しい場面があると思われるが、粘り強く取り組んでほしい。	・校内委員会の回数を確保しながらも、必要時には臨時に行うなど、臨機応変に対応を続ける。 ・家庭へのアプローチについても、必要時に協議を確実に行い、実践していく。
	毎月取組を行い、各種便りやHPで情報発信を行う。理解啓発授業を行う。	3	2	・毎月の便りで内容を掲載したが、詳細等について廊下掲示等も活用する必要があった。 ・児童への理解啓発は進んできたが、教員間の理解もさらに進めたい。	・保護者アンケートでも評価が低い部分である。情報の発信のさらなる工夫が必要である。 ・交流学習を積極的に進めているが、その実態が伝わっていないようだ。 ・教員間の理解については、良い課題把握だと考える。	・教員間の理解を深めるための研修を実施し、理解啓発授業や交流学習に生かしていく。 ・情報の発信として、特別支援教育関係の便りや資料をH＆Sで配信したり、公開時の掲示物を工夫する。